巻頭言

模倣と独創

Imitation vs. Creation

吉永 日出男*

Hideo YOSHINAGA

日本の技術水準も高くなつて、最早、外国で開発された技術に頼るわけには行かなくなつたと、よくいわれる。「自主技術の開発」あるいは「模倣でなく独創を！」の大合唱が起こっている観がある。

我が国では、何事も画一化を好み、制服などを定めて、一斉に同じ行動をとつたり、同じような考え方をすることが喜ばれる。上述の大合唱も、いまや時代の要請であつて、誰もが参加しなければならないことのようなのである。

しかし、本来、独創が独創たり得るのは、他と異なるからとか、あるいは、他にはないからであつて、画一とは正反対のことであろう。その「独創」が「画一的に」叫ばれることには矛盾がないのであろうか。

一方、模倣と独創とは反対語であり、日本人は模倣に優れた才能を発揮してきたが、独創には見るべきものがあまりなかつたといわれる。筆者の狭い知識の範囲でも、確かにそうだという気がする。しかし、語意は正反対でも、使う頭脳の方も「模倣するところ」と「独創するところ」という風にちゃんと分かれているのであろうか。あるいは、模倣と独創とは頭脳の相反する働きなのであろうか。他所で開発された技術とはいえ、それを直ちに理解し、自分のものとして、さらに改良を加えてもつとよい技術に育て上げ得る頭脳が、新しい技術を創造するのに本当に無力なのであろうか。現在の頭脳の機能に関する研究がどこまで進んでいるのか知らないの、あるいは誤っているかも知れないが、どうも筆者には、脳の中に、あるいは機能に、そんな区別はないような気がするのである。模倣をよくする頭脳と独創をよくする頭脳とは同じであろうと思うのである。いかなる独創といえども、既成の知識を取込んでおり、模倣の要素もかなり入っていることを忘れてはなるまい。むしろ、社会環境と個人個人の精神の中に独創を阻むものがあるのではあるまいか。

人々は、幸いをもたらすことには精を出す、不幸をもたらすことは極力抑え込もうとする。どうしても抑えることのできない passion に動かされたときにのみ、人は不幸をもたらすことをも敢て行ふのである。

過去の偉大な天才達は我々に多くの果実をもたらしてくれたが、彼等の中で、その与えた果実にふさわしい尊敬と豊かさを生前に得た者がどの程度あるのであろうか。しばしば、彼等は当時の社会に容れられず、みじめに生涯を終っている。彼等は、不幸をもたらす行動を敢てとつた passion 過剰の人間の

* 九州大学大学院総合理工学研究科。Graduate School of Engineering Sciences, Kyushu University (Fukuoka)

ように見える。現代の科学や技術の世界には、そのような不幸は最早なくなつたのであろうか。

元来独創とは、その度合いが強ければ強い程孤立せざるを得ず、周囲から異端視されるものであろう。とすれば、独創とは、その言葉から受けるイメージの素晴らしさにもかかわらず、実は、常識という合意の上に成り立つ社会の秩序を壊しかねない鬼の子なのではあるまいか。ただし、この鬼子は、やがて素晴らしい果実を社会にもたらすかも知れない鬼子である。もつとも、果実を少しももたらさない鬼子も多いであろう。いや、大部分がそうであるかも知れない。

管理者は、若者に独創性を望むとき、それは豊かな富をもたらす可能性も僅かながらもつてはいるが、ことによると恐ろしい鬼子を育てようとしているのかも知れないということを認識する必要があるのではあるまいか。その危険をおかしてもなお、これを育てるのだという覚悟が必要なのではあるまいか。

一方、独創性を発揮しようとする者は、まづ、自分自身の平安を望む心と戦わなければならないであろう。独創なるが故に、友人や協力者と意見が対立することも辞すわけには行かない。上司の理解が得られない苦しみにも耐えなければならぬ。このように戦い、血を流し、傷ついてもなお、それが報いられることはむしろ稀であろう。このような危険な冒険を敢て行うだけの強い独立自尊の精神がなければ挫折してしまうであろう。

特に我が国のように画一化を好み、個性をあまり尊重しない国が、もつとも、この特性が今日の日本の繁栄をもたらした原動力と考えられ、よい社会慣行としていまや世界的な認知を得つつあるようでもあるが、上述のように、独創性を尊重するとか、あるいは、独創性を発揮するということは、大変なことなのだと思うのである。

しかし、以上は筆者の感想であつて、正しいかどうか定かでない。定かではないが、重要なことだと思うので、過去のいろいろな事例について、独創的な技術が生み出された背景、それを生み出した人々の思想や生涯などを科学的に検討する必要があるだろう。また、現在我々が住んでいる社会環境あるいは社内環境がどのようになっているかを調べる必要もあるだろう。さらに、模倣と独創に関する頭脳の働きや心理学について研究することも必要であろう。新たに何事かをはじめようとするときには、歴史と現状をよく分析してみることが大切だと思うのである。そしてもし、筆者の感想が当たっているということであれば、危険な鬼子を育てられるように社会の慣行を変えるが、それが無理ならば、社内慣行だけでも変えるかする一方、鬼子達による害を最小に抑える工夫をする必要があるように思われる。また一方、技術者は独立自尊の精神を培うことが大切であろう。

以上のような感想をもちつつも、筆者は「独創性尊重」の大合唱に敬意を表し、自らもこれに参加したいと思つている。あるいは、筆者の危惧は杞憂であつて、日本特産のよい子の鬼子という前代未聞の子供が育つて行くのかも知れない。現に育ちつつあるようにも見える。